

浦河海運事情 ―田中回漕店の時代

明治新政府の北海道に対する海運政策上の基本課題は、定期航路によって北海道を本州と結びつけること、沿岸の漁業基地を開拓中心地に連結することであった。

すでに浦河でも、明治初期から函館との間に不定期ではあるものの航路が開かれていた。陸路の発達が不十分だったこの時代、大量の物資を運ぶ手段として、海上交通以外には考えられなかったのである。幸いなことに浦河は自然の岩礁を利用した入江が港の役割を果たし、鮭や昆布を満載した船が頻繁に出入りしていた。

しかしそうした船の来港も荷のある時期に限られ、積荷のきれ冬から春にかけては、パツタリととだえる。その結果、函館からの移入にたよっていた日用雑貨や、食料品も底をついた。明治の前半は、個人の持船にたよらざるを得なかった時代である。

こうした時代背景の中で、明治十九年頃“ニヶ崎汽船株式会社”が、函館、浦河、十勝大津、函館をつなぐ補助航路を拝命。また二十六年には奥田惣兵衛、北川貞七ら地元有志三十九名が、「浦河汽船合資会社」を設立している。しかし同社は、わずか四年で解散。ニヶ崎汽船の定期的な運行も長くは続かなかったようで、定期船の来港はまたとだえることになった。

こうした状況をなんとか打破しようとする日高実業協会会長西 忠義らの奔走により、函館の“金森商船株式会社”の定期船寄港が実現したのが明治三十五年のことである。さらにその後四十年には、命令航路として、函館、浦河、様似、幌泉、広尾、釧路、函館を巡る航路と、函館、幌泉、様似、浦河、三石、静内、函館と日高沿岸だけを巡る航路が定められる。やがて前記のニヶ崎汽船も復活して、夏場は月に六航海、冬場は四航海の巡航をみるようになった（北海道開拓五十年史）。こうして日高沿岸の海運はようやく安定したものとなった。

この船会社の代理店業務を請負い、荷役の仕事を一手に引き受けていたのが回漕店で、この頃浦河には「田中回漕店」と「桂舩部（かつらはしげぶ）」また荻伏には「後辺戸（しりへと）回漕店」（藤原富蔵、北村久吉）があった。

田中回漕店はニヶ崎汽船直属の回漕店として、主に木材、大小豆、燕麦など大口の荷物を扱っていた。小口荷物は主に桂舩部が担当したが、手間ばかりかかって利は薄い。桂の経営はおもわしくなかった。これを助けて、明治四十五年、三石、様似、幌泉、浦河など近在の荷主と函館の間屋が、馬部平一郎（浦河）を中心に、「三場所汽船株式会社」を設立。ニヶ崎汽船株式会社に対抗する形となった。しかしこの三場所汽船株式会社は、持船の第一日本海丸、国引丸、神威丸が次々に沈没するという悲運に見舞われ、大正九年、惜しくも解散せざるを得なくなった。

様似で船火事を起こして沈没した鉄船国引丸（一九九ト）は、蒸気釜が海底より引き上げられ、三場所汽船株式会社の形見として、山寺（光照寺）境内の藤の木の根元に据えられた。それはつい最近までそのままそこに残っていたという。

一方田中回漕店は、様似の三上重蔵、新保惣吉らと共に、「三好商会」を設立し、ニヶ崎汽船没落後に出現した“千島汽船株式会社”の総株数の半分を取得するというますますの繁盛ぶりであった。

昭和五年には念願の浦河港が完成。サケ、マスなどの最盛期には仲買人により直接取引もなされ

、臨時の冷蔵船の運航もあって、港は一段と活気を呈した。昭和九年発行の浦河港大観によれば、当時田中回漕店（「浦河運輸合名会社」）の他に浜田定次郎の経営する「浦河海陸運輸株式会社」があったが、この頃田中回漕店では、金森商船株式会社、三好商会、千島汽船株式会社の浦河就港汽船の荷積み扱い、東山丸、東郷丸、第五、第六日高丸など十船が来港していたという。定期的取扱移出品の主なものは、水産加工品、昆布、魚粕、雑穀、木材など、移入品は米、味噌、酒、日用雑貨などの生活必需品や、農耕用の化学肥料などであった。

これらの物資と旅客を、碇泊中の汽船へ舳で運ぶため、田中回漕店では荷役に従事する労務者を常時十五名位確保していた。荷の積み下ろしは重労働であり、危険が伴う上、時間の制約があって屈強な若者が要求された。従って待遇は当時としては破格の扱いだったという。

量的にも膨大な木材の積み込みには主にアイヌの人たちが従事していた。冬期間雪を利用して運び出された角丸太が、浜土場に山積みされている。三月、朝二時か二時半、沖がかりしている船の中で、「ゴメが鳴き出したぞ、そろそろ始めるか」という声とともに引き船が動き出す。浜では積み上げた丸太がくずされ、焚き火にあたりながら、胸まで水につかってに組む作業が交代で行われた。

田中回漕店で一生の大部分を送った室谷幸吉の手元には、屋号<ウ>の半天を着た男女の中に、日本髪 of 芸者が入り混じった幾枚かの花見の写真がある。当時は芸者を上げての花見も、写真機を個人で持つことも、まして記念に北辰館の写真師を呼んで撮影することも、随分豪勢なことであった。時代の寵児としてもてはやされた古き良き時代のよすがである。

こうして明治二年に来浦した田中善三郎以来、四代に亘って隆盛を誇っていた回漕店だったが、昭和十年の鉄道開通により、社業は一気に衰運に向かい、廃業に追い込まれていった。栄枯盛衰、ともに時代の然らしむるところであった。

[文責 田中]

【話者】

室谷 英夫 浦河町大通二丁目 大正十一年生まれ
塚田 正吉 浦河町大通二丁目 明治四十年生まれ

【参考】

北海道経済の百年 昭和四十二年 北海タイムス社
浦河港大観 昭和九年 浦河漁業組合
様似町史 昭和三十七年 様似町史編さん委員会